

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 30 日現在

機関番号：34206

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22500556

研究課題名（和文） スポーツ原体験とパーソナリティ発達に関する研究

研究課題名（英文） A study on the proto-experience in sport and personality development.

### 研究代表者

奥田 愛子（OKUDA AIKO）

びわこ学院大学 教育福祉学部・講師

研究者番号：70556000

研究成果の概要（和文）：スポーツ参加は望ましいパーソナリティ発達を形成することが期待されている。このパーソナリティ発達には、各個人におけるさまざまな出来事（体験）が影響していることが考えられる。そして、その理解のためには、従来の青年期における研究に加えて、青年期以前のスポーツ経験の影響を包括的に扱うような研究枠組みを導入する必要がある。そこで、本研究ではスポーツ原体験を、「スポーツ参加に関連する全ての事象を含み、児童期における最も印象的で、かつ重要な意味合いを有すると個人が判断する経験」と定義づけ、スポーツ経験に限定した原体験の内容と構造について分析を行った。

研究成果の概要（英文）：Sport participation is expected to help to form desirable personality development. Various experiences/incidents are considered as affecting personality development. For a fuller understanding, we need to propose a research framework that addresses in a comprehensive way how these experiences/incidents affect each person's personality development; while previous works tend to mainly focus on the adolescent period, we also take into account the period prior to the adolescence. This study defines proto-sport experiences, including every factors relating to the sport participation, as "a childhood experience that a person considers as the most impressive and significant", and attempt to analyze its structure and elements.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：スポーツ原体験、パーソナリティ発達

## 1. 研究開始当初の背景

本来、スポーツ参加は望ましいパーソナリティ発達を形成することが期待されている。しかし、昨今の大学運動選手の反社会的・非社会的な問題行動はその期待を裏切っている。スポーツ参加とパーソナリティ発達に関する研究は、スポーツ心理学領域の重要な研究テーマの一つである。本研究は、これまで青年期のスポーツ選手を対象に、このテーマについて Erikson のアイデンティティ理論をもとに検討を行ってきた。ここでは、1) 競技活動中に生じる様々な経験（スポーツ経験）の内容とそれらへの対処行動のあり方は、青年期のスポーツ選手のパーソナリティ発達に影響すること(中込・奥田 1993、他)、2) 青年期の運動選手のパーソナリティ発達には、スポーツ経験における危機事象の影響が大きく、そのうち、身体面の危機事象としては「競技成績や技術の停滞」「怪我」、心理面の危機事象としては「指導者・チームメイトとの関係のもつれ」、「部活動の継続の意義」があること (TAKENOUCHI, TAGUCHI & OKUDA 2004)、3) スポーツ経験における危機事象への対処行動のうち、探索/探求方略や自己投入方略が青年期のスポーツ選手のパーソナリティ発達と関連すること (竹之内・田口・奥田 2006) という結果が得られた。これらの結果は、アイデンティティ理論を援用することで導かれたもので、青年期特有の心理的な発達課題を包含する。つまり、これらの結果は青年期における限定的な結果と言っても過言ではない。したがって、スポーツ参加とパーソナリティ発達に関連に係る研究テーマをより発展的に理解するには、青年期以前を含めたスポーツ経験の影響を包括的に扱っていく必要がある。そこで、本研究はスポーツ原体験という概念を研究枠組みに導入

することで、この研究テーマをより一層進めようと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまでスポーツ系大学のカウンセリングルームで相談活動を実践してきた。そこでの相談者の多くは、スポーツ選手特有の心理的な問題を抱えていた(奥田 2005, 2006, 2007, 2008)。そして、その問題が家族関係も含めた児童期のスポーツ経験に関連していたことから、児童期にはその後の長きにわたるスポーツとの関わり方に影響を及ぼす重要で印象的な体験、つまり、スポーツに関わる児童期の重要な体験(スポーツ原体験)の存在が考えられた。また、著名なスポーツ選手のインタビューや回想録等には、スポーツに専心しはじめた当初の鮮烈な体験が数多く語られている。さらに、新保(2001)の、原体験を始点とした個々の体験の積み重ね(連続性)が各個人においてさまざまに意味づけられることで、他人とは違った『個性』が表れるという主張は、原体験とパーソナリティ発達との関連を述べるものである。

原体験とは『人の思想形成に大きな影響を及ぼす幼少時の体験(広辞苑第六版)』とあり、その重要性について指摘されてはいるものの、それに関する研究はそれほど多くはない。そうした中であって、原体験の内容と職業志向性・心理的な安定感情と不安定感情との関連については、これまでに報告され原体験の影響が確認されている。一方でスポーツ経験における原体験について検討したものは、これまでない。そこで本研究では、スポーツ原体験を「スポーツ参加に関連する全ての事象を含み、児童期における最も印象的、かつ重要な意味合いを有すると個人が判断する経験」と定義づけ、スポーツ経験に限定

した原体験の構造と内容についての分析を行い、パーソナリティ発達との関連を検討した。

### 3. 研究の方法

(1) 原体験に関する文献研究を行った後、大学運動選手を対象として、児童期におけるスポーツ経験の中でもっとも印象深い出来事についての逐語データを得る。さらに、先行研究をもとに、これらをスポーツ原体験の種類と語りの特徴に沿って分類表を作成する。

(2) 大学運動選手を対象として、児童期におけるスポーツ経験の中でもっとも印象深い出来事についての質問紙調査を行い、得られたデータをスポーツ原体験の種類と語りの特徴に沿って分類する。

(3) スポーツ原体験の種類と語りの特徴に沿って分類された対象者のうち、特徴的な者について調査面接を行う。

### 4. 研究成果

スポーツ原体験についての記述内容の分類にあたっては、書き手である調査対象者と書かれた体験との心理的な距離が反映されていた。言い換えれば、記述内容には出来事とともに当時の感情や興奮といった情動体験の程度、および、喚起された情動体験を各個人がどのように内的処理を行い記述したか、といった対処様式が反映されたものと思われる。各々の記述には、情動体験がみられないものや、強烈な体験が未だ個人内で意味づけされず「今、ここで」の出来事の説明に終始してしまうもの、あるいは当時を振り返り体験を生き生きと表現しながらも現在の評価や意味づけを盛り込んだ記述等、個人内での対処様式には差異がみられた。この差異はスポーツ原体験を始点とした体験の連続性に依るものであり、各個人の対処能力ひい

てはパーソナリティ発達の程度と関連するものと思われる。なお、スポーツ原体験の種類と語りの特徴に沿って分類した一部は国内学会および、国際学会にて発表した。

スポーツ原体験は、スポーツ原体験を始点としたその後のスポーツ活動における体験の連続性の程度や、現在への意味づけに焦点をあてている。現在に生きる語り手が、過去のスポーツ原体験をどのように受けとめ語るかは、現在から過去とのつながりを意味づけようとするということでもあると考えられる。また同時に、そのような意味づけの様式は、現在のスポーツに対する価値観や態度を反映するものとなる。このようなことから、スポーツ原体験の体験様式のその後のスポーツに対する価値観や態度の形成への影響について検討することが、今後の新たな課題として提起される。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①奥田愛子・谷君江・浅田昇平、子どもの頃の遊び体験についての調査一遊び場や原体験との関わり一、びわこ学院大学研究紀要、査読有、第2号、2011、61-70

②奥田愛子、スポーツ原体験の内容に関する予備的検討、びわこ学院大学研究紀要、査読有、第3号、2012、31-34

③竹ノ内隆志、奥田愛子、大畑美喜子 運動選手の自我発達プロセス：危機事象の発達的变化に基づく検討、体育学研究、査読有、57巻、2012、379-398

[学会発表] (計7件)

①Okuda A A study on the proto-experience in sport. International Conference on Sports and Exercise Sciences, Chiang Mai, 2011

②Okuda E and Okuda A Differences in

sport performance and personality traits between a pair of monozygotic twins. The 13<sup>th</sup> International Congress on Twin Studies, Seoul, 2011

③奥田援史、奥田愛子、堀井大輔 優秀運動選手の一卵性双生児1例における心理的競技能力の差、日本体育学会第61回大会、愛知、2011

④奥田愛子 スポーツ原体験の内容に関する予備的検討、日本スポーツ心理学会 38 回大会、東京 2011

⑤Nakagomi S, Okuda A and Suzuki A

Preliminary study on characteristics of athletes' proto-sceneries. 6<sup>th</sup> ASPASP International Congress of Sport Psychology, Taipei, 2011

⑥奥田愛子、中込四郎 アスリートの実験の原体験の特徴、日本体育学会第 63 回大会、神奈川、2012

⑦中込四郎、奥田愛子、鈴木 敦 トップアスリートの自伝から「原風景」を読む、日本スポーツ心理学会第 39 回大会、石川、2012

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

奥田 愛子 (OKUDA AIKO)

びわこ学院大学 教育福祉学部・講師

研究者番号：70556000